

日系ブラジル人・日本人間のコミュニケーションギャップ考

笠原真美

1. 研究の視点と方法

近年、日本における日系ブラジル人¹⁾の研究に注目が集まっている²⁾。それは、1990年に出入国管理及び難民認定法（以下、入管法）改正³⁾が大きく影響していると考えられる。

渡辺（1995a）は、日系ブラジル人の出稼ぎをめぐる状況、就労、生活環境など多角的な視点で日系ブラジル人を検討している。また、日系人を「生活者・住民」の視点で研究している研究の一つに広田（1994）がある。そして、日系ブラジル人のアイデンティティーを、来日している人と、日本からブラジルに帰国した人の両者から見ている研究に、コガ（1995）がある。一方、日系人集団出稼ぎ（地）という「移住」による影響という視点で述べているのが、淵上（1995）である。

このように、これらの日系ブラジル人に関する研究は、極めて多岐にわたる角度からアプローチがなされている。だが、これまでの研究の中では日系ブラジル人と日本人のコミュニケーションギャップの問題は、トピックの一つとして捉えられている程度である。その理由は、出稼ぎ問題や労働問題など、短期滞在者としての日系ブラジル人研究、及び日系人の滞在の長期化によって地域の住民としての日系ブラジル人研究が中心である為だ。それでは、日系ブラジル人・日本人のコミュニケーションギャップはどのように検討すべきか。まずコミュニケーションギャップの「コミュニケーション」から考えたい。

久米（久米，1993）は、「コミュニケーション研究はきわめて多種多様であり、その研究を概観しても、まとまりがつかないほどの広がりを持っている」と言っている。その理由は、「コミュニケーション現象は、自然、社会、人文科学のほとんどあらゆる分野に関わっている」（p.26）からであろう。また、成毛（1993）は「コミュニケーションの広義の意味を『ある複数の人間が互いに影響を与えあうすべてのプロセス』」（p.126）

としている。よって、本稿におけるコミュニケーションの定義もこれにしたがうことにする。

次に本稿でのコミュニケーションを、対象から捉えて考えてみたい。本稿で対象としているのは、日本人と日系ブラジル人である。双方は、互いに異なる文化的背景を有している者同士であるので、「異文化コミュニケーション」と言える。コンドン（1980）は、異文化コミュニケーションの重要性の一つに、それぞれが行った行動がいかにかに認知され解釈されるか、つまり、意味の付与がなされているかを挙げている。その意味の付与は、自分の属する文化的背景に規定される。

したがって、あるコミュニケーションを行い、それを解決する場合、文化的背景が違うことにより解釈が異なってしまうことがある。この解釈の差、意味の付与の違いが、コミュニケーションギャップである。それでは次に、コミュニケーションギャップを見ると、コミュニケーションという行為のどの部分に焦点を当てるべきかを考察してみたい。

コミュニケーションは、相手がいなければ成り立たない。よってここで扱うコミュニケーションは、2人ないしそれ以上の比較的少数の人間が対面状況で行う「対人コミュニケーション」（平井，1993；p.84）である。また、コミュニケーション・ギャップの原因は、コミュニケーションにおいて交わされた「言葉」の意味づけの食い違いである。つまり言葉を用いる言語コミュニケーション Verbal Communication⁴⁾と言える。また、対人コミュニケーションをする時、会話だけからメッセージを受け取っているのではなく、相手の表情やジェスチャーなども気に止めるだろう。「顔を伺いながら話す」という言葉があるくらい、コミュニケーションでは非常に重要である。この言葉以外のコミュニケーションを、非言語コミュニケーション Non Verbal Communication という。橋本（1993）は「非言語コミュニケーションにおける言葉による刺激を除いたあらゆる刺激人間と環境の両面から生ずるもの」を含む。それ

はメッセージの送り手や受け手にとり、内在的な伝達価値を持つものである」(p.178)と定義している。

以上、日系ブラジル人に関する研究動向とその中でコミュニケーションギャップの視点について考察した。その結果、本稿では日系ブラジル人と日本人の間で実際に行われたコミュニケーションをとりあげ、その中でお互いをどのように意味づけしているのか、またそのことによって、どのようなコミュニケーションギャップが生じているのかという点に着眼する。次章では調査を行った川崎市と日系ブラジル人との関係の特徴を述べたい。

2. 調査の概要

(1) フィールドの設定

川崎市をフィールドとした第一の理由は、群馬県の太田市や大泉町、静岡県浜松市のような日本国内で日系人が集住している典型的な地域(渡辺, 1995a ; p.96)とは違い、川崎市は日系ブラジル人が集住していない地域であるためである(第1図)。日系ブラジル人と日本人のコミュニケーションギャップを考える際、日本人と接する機会の多いところの方が、お互いにコミュニケーションギャップを経験する可能性が高いと考えたからである。

第二の理由は、川崎市が上記の条件に加え、かなりの数の日系ブラジル人の方が在住または在勤しているためである。1996年5月末現在で、1,808人である⁵⁾。

第三の理由は、川崎市においては、日系ブラジル人が地域の中で特別視されていないことである。「完全に市内に生活の基盤を持った在日韓国・朝鮮人、ライフスタイルに合わせて生活し始めた欧米系やフィリピン系、そして来住してまだ日の浅い中南米系やアジア各地出身の市民が、それぞれかなりの規模で一つの市域内に共存しているのが、川崎市の大きな特徴である。」(川崎市, 1993 ; p.34)からも分かる。

(2) 調査の方法

日系ブラジル人側の話は、川崎市在住又は在勤の方を中心とした日系ブラジル人11人(男性6人、

女性5人)から伺った。ここで「川崎市在住又は在勤の方を中心とした」という表現をしたのは、11人中4人が市外の方だからである。というのは、調査を行ったのが、すべて川崎市内であり、川崎に来ていた人にアポイントメントなしでお話を伺った場合もあるためである。調査方法は、聞き取り調査で、すべて対面式の聞き取りをした。使用言語は日本語だが、非日系人であるBさんとCさん、日系人のHさん(2世, 20代, 男性)とEさん(2世, 30代, 男性)は通訳または一部通訳での聞き取りである。

日本人側の話は、川崎市で日本語ボランティアをしている、Lさん(午前中のクラス担当, 年齢不明, 女性)とMさん(夜間クラス担当, 60代, 男性)から伺った。また、Mさんの知り合いの方で日系ブラジル人の方を多く雇用している工場にお勤めの方がおり、その工場からの話も少し交えていく。よって、本稿では日系ブラジル人と日本人の双方からコミュニケーションギャップを見ていくが、日系ブラジル人の視点が中心となったことを、あらかじめ断っておきたい。

以下、聞き取りから得られた情報の中でコミュニケーション・ギャップと考えられるものを、それが生じた具体的な場面をケース・スタディとして分類し、考察したい。

3. 日系ブラジル人からみた日本人とのコミュニケーションギャップ

(1) コミュニケーションギャップの事例

ケース① 挨拶

Gさん(日系2世, 20代, 男性)は、「東京だからかもしれないけど、人が冷たいって感じますね」ともらしていた。その理由は、「挨拶しても、かえってこないんですよ」と言う。特に若い世代の人(35歳以下)が知らん顔をするそうである。

Gさんは、ある日本企業でシステムエンジニアとして働いている。ブラジルでその会社の面接を受け、入社した。したがって、いわゆる出稼ぎの人とは状況が違う。日本語も堪能で、どこから見ても日本人という方である。

彼が、日本人は挨拶をしてくれないと感じたのは、会社の独身寮においてである。同じ会社に勤

め、同じ寮に住む人は顔なじみなので、Gさんは挨拶をした。相手が気づかないような声ではなかったし、目もあったようだ。しかし、挨拶を返してくれない。しかも、一人だけではなく、何人もそうであるとのこと。だから、Gさんは「日本人は冷たい。挨拶をしないなんて失礼だ」と感じているのである。

Gさんと似たような経験を、Kさん（3世、40代、女性）もしている。彼女の場合は、同じ職場の日本人に会社の外で挨拶したが、無視されたと言っている。

ケース② 方言や大きな声で話しかけられた

日系ブラジル人の多くの方は、いわゆる方言を使っている地域で仕事をした経験がある。今回お話を伺った中で、Fさんがその一人である。彼は最初、筑波で働いていた。筑波での日常会話は方言である。Fさんは日本に来るのは初めてで、日本語が分からなければ仕事もわからないという状態であった。そのような中で、方言でまくし立てられた。その語調に怒られていると感じてしまったようだ。「自分は何も悪いことをしていないのに、相手がなぜ怒ったか理解できない。それに対して何も言えなかった自分が悔しい」と語っていた。

大きな声で言われたことに対して、ショックを受けたケースもある。これは、Iさん（2世、30代、女性）が受けた、ある日系ブラジル人の相談事のケースであることを、まず断っておく。その人は工場現場で仕事をしている。そこでは、すごい騒音がしている。また、現場では事故がでかねない危険な状況であるから、その日本人は非常に大きな声で、怒鳴るように指示したのである。一方、指示を受けたその日系ブラジル人は、それを仕事の指示ではなく一方的に怒られてしまったととった。その結果、その日本人に対して非常に悪い感情を持ってしまったのだ。

ケース③ 言葉をストレートに解釈してしまう

日本人は仕事が忙しいなど、大変な思いをしているときに、「もう死にそう（に忙しい）」などと言うことがある。また、子供同士で喧嘩をしている時、「お前なんか死んじまえ！」と罵り合う

こともある。

このような日本人の言動に対して、Gさん（2世、20代、男性）とIさん（2世、30代、女性）は、「日本人はなぜ軽々しく『死』という言葉を使うのか理解できない。今、日本の小・中学生の間でいじめが多く、彼らの中には自殺まで平気でしたり、させてしまったりする。ブラジルでは考えられないことだ」と言っていた。さらにGさんは、「将来、結婚して子供を持つことになる場合、いじめが多い日本の教育は良くないので、日本は好きだが、ずっと日本にいたことが一番良いこととは、今のところ考えていない」と言う。またIさんは「ブラジルはカトリックなので、自分で自分の命を取ることは地獄に行くことなんです。そんな恐ろしいこと、絶対に言いません。日本人は昔から『負けたら切腹』という習慣があるから、『死ぬ』と簡単に口に出すかも知れません」と指摘した。

「死」、特に自殺に対して上のような考えなので、日本人が「死」という言葉を頻繁に使うことを、「とんでもない」と判断している。しかし、日本語の「死」や「死ぬ」の意味合いは、単に命が終わるという意味だけでなく、一生懸命や、うまく物事がいかない意味も含んでいる。

ケース④ 細かいことをいちいちいわれる

Jさん（2世、40代、男性）は、日本で感じるブラジルとのギャップを次のように語った。「日本にいと、上から抑えられている感じがするね。『ゴミはちゃんとここに捨てなさい』、『たばこはここで吸いなさい』、『医者に行くときも、何時にいくか、いつ帰るのか、何故行くのか』と言われる。何か新しいものを持っていると『どこで買ったのか』『いくらしたのか』という具合だよ」といつも聞かれる。

何故、彼はこのように感じるのか。Jさんの、仕事中に医者へ行く場合のエピソードを取り上げてみれば、Jさん曰く、「ブラジルでは、仕事中に医者に言っても構わないね。何時に行ったらいいし、帰ってくる時間も伝えることもないし、『ちょっと、行って来るよ』『行ってらっしゃい』で済むね」だそうだ。

ケース⑤ 日本人に「なぜ日本語で話さないの」と怒られた

Kさん(2世, 40代, 女性)は、弁当を作る工場に働いている。一緒に仕事をしている日本人は、かなり年輩の女性が多い。彼女の職場では、20代前半のKさんの姪も働いている。そんなある日、お昼休みにKさんと彼女の姪はポルトガル語で話をしてた。そこを通りかかった工場の日本人、いわゆるおばさん達に、「なんであんたたちは日本語で話さないのよ」と言われてしまったらしい。

Kさんは次のように語った。「ちょっと何かを言うとき、日本語よりもポルトガル語の方が楽だし、すぐに言いたい言葉が出てくるから使ったの。誰だってそうでしょ。同じ国同士なんだから。日本人には、いつもちゃんと日本語で話しているのに」と。

ケース⑥ 旅行や電車での日本人の振るまい

Kさんはとても旅行が好きで、日本に来てからも一人旅をしているくらいである。

あるツアーで京都に行った時のこと。せっかく見所がたくさんあるのに、日本人は景色や観光をゆっくりと楽しまない。そのかわり、彼らはお土産を買うことに一生懸命になっている、と彼女には映ったらしい。中でもKさんを一番驚かせたのが、「お土産を買うためだけに30分もバスが止まったのよ」ということだ。

もちろんKさんも、会社の人にはお土産を用意した。だから、お土産を買うこと自体は不思議とは思わなかったそうである。しかし、本来の目的である観光は二の次で、お土産を買うことだけに楽しみを感じているその姿に幻滅したらしい。

電車内でのギャップは、JさんとKさんから伺った。二人が感じたのは、「なぜ日本では電車の中にあれだけ人がいるのに話をしないのだろう」ということだ。

Jさんは、「ブラジルでは、電車の中で何度か会ったら、もう顔なじみだから挨拶をしておしゃべりをするけど、日本人は何度も同じ車両で会って見たことがある人でも絶対に話さないね」と。また、Kさんも「電車で2、3回会ったら挨拶をして、道中、話し相手になるよ。そのかわり、日本人は電車の中で立ったまま寝るし、座ってすぐに寝るからおもしろいね」と話して下さった。

ケース⑦ 日本人の話題

Dさん(2世, 40代, 男性)とEさん(2世, 30代, 男性)に「日本人のことをどう思いますか」と言う質問をしたところ、Dさんからは、「日本人が集まっているところ(特にお酒を飲んでいる時)は仕事の話ばかり」と、またEさんからは「日本人は仕事のことばかり考えている」と言う答えが返ってきた。たしかに、居酒屋などでの日本人サラリーマンの話題は仕事の話が多い。2人はこの様子をみた上で、日本人を「つまらない人々」と意味づけをしている。

2人は次のように続けた。「ブラジル人は、仕事の話はあんまりしないね。サッカーの話、ブラジルの話、それと女の話(笑)いろんな話をするね」「ブラジル人は自分の生き方をするね。日本人と考えることが違う。そして、明日のことを考える」と。

次に、日本人の話題が日系ブラジル人を不安にさせている例を紹介しよう。

Kさん(3世, 40代, 女性)は、よく同じ職場の日本人女性から「○○さんって□□で、いやよね。あなたもそう思わない?」と話しかけられたりすることがあるそうだ。ちなみにその女性は、○○さんと普段はとても仲良くしている。また、他の人もKさんに同様のことを言う。Kさんは「こういう事を言われると、私の悪口もみんなに言われているのではないかと感じる。差別されているのではないかと思う」と話していた。

ケース⑧ 日本人のお付き合いの仕方

Cさん(非日系, 30代, 女性)は、日本人男性と結婚して日本で生活している。が、日本人は近所づきあいが少なく寂しいと感じ、日本語を学び始めた。Cさんは言葉の壁のせいだと思っていたが、実は日本人はコミュニケーションが少ないことに気が付いたそうだ。だからCさんは「日本人の前ではおとなしくしている」そうだ。

また、Aさん(3世, 30代, 女性)とJさん(2世, 40代, 男性)は、「日本の昔ながらの文化(しきたり)が分からない」「エチケットが分からない」「よくお隣さんからいろいろと頂くが、どうやってお礼をしてら良いか分からない」(Jさん)と言う。

Aさんは、日本人男性と結婚している。だから、

夫にいろいろと細かいことを教わっているらしいので、「難しいですね」とおっしゃるものの、それほど問題が生じているわけではない。しかし、Jさんの場合、ビジネスでのエチケットが分からないと悩んでいるようである。それは「日本の企業との取引で何かミスをしてしまった場合、それがたとえ些細なことだとしても、厳しく注意される上、お詫びの品まで持っていかなければならない。」からも伺える。また、Kさんも日本人同士のつきあい方に疑問を感じている。「日本人はお客さんに台所を見せないし、あまり家にお客さんを連れてこない。ブラジル人はちらかっていても気にしない。友達は家族のようなものだもの。そしてみんなでテーブルでおしゃべりする。これが楽しいね」と。

ケース⑨ ボディーランゲージ

Bさん（非日系、20代、女性）は、ある日、道を歩いていた時、電話ボックスの陰から日本人男性が、彼女に向けて中指と人差し指の間に親指をはさむジェスチャーをしたそうだ。彼女はその男がなぜそうしたのか分からなかったの、後で知り合いの日本人に、その男のした動作が、何を意味していたのか尋ねてみたそうだ。この仕草のブラジルでの意味は、英語で言うところの Good Luck、つまり「幸運を祈ります」という意味だ。しかし、日本でのその意味は、「男性が女性を（性的に）誘う」ことである。この男性の非言語メッセージに、Bさんはブラジルの意味で解釈し、同じ動作をその日本人男性に対してしていたら、Bさんは大変なことになっていたのである。

またAさん（3世、30代、女性）は、日本のタレントが時々テレビでやる、右腕の力瘤に左手を添えて右肘から下を折り曲げる動作をすることが信じられないと言っていた。その理由はAさんによるとブラジルでのその動作の意味づけは、「あなたと喧嘩しますよ」ということである。一方、日本でのその意味は、「ガッツポーズ」である。Aさんは、大変流暢な日本語が話せる方である。しかし、ボディーランゲージである日本語でのその意味を知らなかったために、不快な思いをしたのである。

(2) コミュニケーションギャップの原因とその解決

日系ブラジル人からみた、コミュニケーションギャップの原因を考察してみよう。

まず、全般に原因となっていることは、「ブラジルの常識を日本にも求めてしまうこと」である。これは、特にケース①、②、③、④、⑧が顕著である。その中でも「挨拶」は、世界中どこでも行われるものなので、「自分たちのやり方が一般的だ、正しい」と思いがちである。だから、なかなか相手の世界の挨拶の仕方が、自分の常識にはならない。些細なことでも、日本とブラジルでは無数の差が存在するのである。

また、「言語コミュニケーション、非言語コミュニケーションのメッセージを、ブラジルでの意味で解釈してしまう」のも、コミュニケーションギャップの大きな一因である。これは、ケース③、⑨に現れた。ただし、ケース③の場合は言葉であるが、その言葉を宗教観の違いで判断したために起こったギャップである。しかし、ケース⑨の場合は、言葉ではないが、ブラジル語のメッセージである。

他の外国人と比較して、日系ブラジル人のコミュニケーション・ギャップの特徴は、日本語が流暢であればあるほど、日本人の価値観や習慣、常識が身に付いていると思われてしまうことである。特にケース①がそうである。今回の聞き取り調査では、Gさん（2世、20代、男性）だけだったが、Aさん（3世、30代、女性）、Iさん（2世、30代、女性）、そしてJさん（2世、40代、男性）も大変、日本語が流暢な方であるから、このような経験をしている可能性がある。

それから、「日本人と深く付き合う前に、日本人の行動様式などからマイナスイメージを抱いてしまうこと」も原因だと考えられる。これは、ケース⑥、⑦にみられる。どちらかというともあまり日本語ができない人が、このような原因で、コミュニケーションギャップを感じているのだと思う。さらに、このタイプだと、さらに日本人に嫌気がさして、今まで以上にコミュニケーションを凶らなくなり、マイナスイメージが肥大化し、コミュニケーションを回避するという悪循環に陥る危険性がある。Eさん（2世、30代、男性）がその例と言える。

そして、最後に「日本人が、日系ブラジル人に日本の常識を必要以上に押しつけること」を挙げたい。これは、ケース⑤である。

以上日系ブラジル人の目からコミュニケーションギャップを見たのだが、その原因には日本の常識、日本人の行動、言動などの性質が大きく関わっていることが言えた。そこで、第4章では、日本人の視点から見た、日系ブラジル人とのコミュニケーションギャップを見ていくことにする。

4. 日本人から見た日系ブラジル人とのコミュニケーションギャップ

(1) コミュニケーションギャップの事例

ケース① 日系ブラジル人の顔つきや日本語からのイメージ

次のことをLさん（年齢不詳、女性）とMさん（60代、男性）お二人とも指摘していたことである。LさんもMさんも、日本語教師のボランティアをしている。他の外国人と比べて特に日系ブラジル人は発音の癖が少ないと彼らは感じるようだ。

一見、このことでコミュニケーションギャップが少なくなると思われる。しかし、顔つきが日本人と同じで、日本語の発音も癖が少ない（日本語能力が高くない場合も）ことで、日本人が彼らに親しみを覚える。そして、日本人は日系ブラジル人に対して、日本人と接するように接してしまうのである。

もちろん日系ブラジル人はブラジルの文化や常識、価値観を持っている。したがって日本的なコミュニケーションができない場合が多い。それは第3章第1節からもよく分かることである。だから、日本的なものを求めた日本人は、そうでない行動をとる彼らから裏切られた心境になるのだ。その具体的な例は、「それでねえ」などの友達言葉を使われた（Lさん談）や、「丁寧語、敬語、謙譲語を使わない」や、「家に遊びに来てね」と挨拶したら、本当に来てしまった（Mさん談）などである。

その一方で、LさんもMさんも「かなり会話ができる人でも、あまり読み書きをできなく、特に漢字は苦手だ」と指摘していた。だから、「役所関係のいろいろな手続きや文書、通知書の理解や作成ができない、また、病気で病院に行くときも

微妙な症状などの説明や医学的な専門用語ができない、医師の説明もよく理解できない」（工場からのコメント。第2章参照）や、薬の処方箋が理解できなかったりする（Mさん談）とすることだ。

話すことはできても、読み書きは苦手。それでは聞く能力はというと、「かなり高い」というように、日系ブラジル人の日本語能力は、ある部分では日本人並でも、ある部分では全く日本語ができないという特徴がある。

ケース② 敬語表現を使えない・使わない

このことを、LさんもMさんも指摘していた。また、筆者がお話を伺った日系ブラジル人の方のほとんどが、敬語は使っていないかった。

ケース①で紹介した、Lさんが経験した「それでねえ」などの友達言葉で話しかけられることも、これに含まれる。そのことに対して、Lさんは「仕方がないですね。少しずつ覚えていってもらうしかない。」とおっしゃっていた。彼女がこのように「仕方がない」と言っているのは、ボランティアであっても、先生という立場だからであろう。日本では、先生は尊敬されるべき存在で、先生には普通敬語を使う。しかし彼らは先生を敬うものの、敬語を使うという感覚はない。また、Lさんは日本語を外国人に教える立場の方なので、彼らが敬語を使えない事は知っている。しかし、「他の日本人は日系ブラジル人に対してそれほど理解があるわけではないし、敬語、丁寧語、謙譲語は日本語の大きな特徴の一つだから、教師の立場からきちんと教える必要があると思います」ということだ。

それでは、なぜ日系ブラジル人は、敬語表現が使えないのであろうか。

Lさんによると、「ポルトガル語には、日本語のような敬語表現はなく、そのかわり、英語で言うMr./Mrs. やpleaseといった表現をするんです。だから本質的に敬語が分からないのではないのでしょうか。それから、日系ブラジル人は働きに来ているから、日本語を教室で習う前に、会社であまり行儀の良くない言葉を覚えてしまうんですよ。最初に覚えた言葉を直すのは大変みたいです」ということだ。

Mさんは、この原因を次のように考えている。「日系ブラジル人に限らず、外国人の方は、敬語

表現が分かっているけど、どんな場合に使ったらよいか分からないんだと思います。また、「です・ます」を最初に教えても、dictionary form（行く、書くなどの言い切りの形）が身に付いてしまうとそっちの方をよく使ってしまうですね。でも日系ブラジル人の方は、他の国の人に比べて、日本人に対してあまり失礼な表現は少ないですよ。感覚的に分かっているんじゃないですか」と。

ケース③ 遠回しな言い方をする日本人

Mさんによると、「日本人は、相手を傷つけないようにと遠回しの言い方が多いですよ。それが、日系ブラジル人には、『日本人は何を考えているか分からない、嘘つきだ』と誤解されてしまうんですよ。こちらでは相手を傷つけないように遠回しに断っても、それを断られていると思ってくれないんですね」だそうだ。このことについては、渡辺（1995b）も、「例えば日本人が『考えておいてやるよ』と言った場合、ブラジル人は肯定と受け止めるが、日本人は否定を意味しているかも知れない」（渡辺、1995b；p.133）と述べている。このことから、日本人は「なぜ、断つたのに怒っているのだろう」と思い、日系ブラジル人は日本人を「嘘つきだ」と思うのであ

ケース④ 外国人は嫌いだという思いこみ

これはMさんから聞いた話であるが、彼がこう思っているのではない。Mさんは多くの日本人と接してきた結果、日本人の傾向として、このことがあると感じているようである。

外国人が嫌いな人は、外国人と接した上で嫌いになってしまったのであろうか。答えは違うと思う。外国人とあまりコミュニケーションをしていないのに、「彼らは外見が日本人と違うから、きっと日本人と考え方が違う。だから嫌いだ」と勝手に「外国人＝嫌い」という考えを頭の中に植え付けているのではないだろうか。たとえばKさんが静岡県H市の、あるスーパーで買い物をしているとき、「ブラジル人がいるから、バックとか気をつけて下さい」という店内放送が入ったそうだ。

ケース⑤ チームワークで仕事をするのが苦手な日系ブラジル人

このことは、Mさんが、ある工場の方に聞いた話である。この工場からのコメントでは、「仕事面では個人主義の徹底した国で育っているために日系人同士の間でも強調する・させることが困難で、チームワークで調和することが苦手だと考えられます」ということであった。

残念ながら、具体的にどの様な形でコミュニケーションギャップが起こったのかは何うことができなかった。ただ、工場側からは、「やはり、言語の問題から会社の情報、指導、教育が行き渡らないために安全管理、衛生管理、品質管理の面、規則などの厳守、指導が疎かになりやすいと思われます」という話である。これから分かることは、この工場で働く日系ブラジル人が、言葉が分からないことだけでなく、この会社の様々な規則そのものがあまり理解できていないことである。

ケース⑥ 凝視、接近、お辞儀をしない

LさんもMさんも、そして筆者も、「日系ブラジル人は話をするときにじっと見つめ、目をそらさない」と感じている。時には彼らの、この「凝視」は迫力があるため、日本人は恐怖心を抱いてしまうかもしれない。日本人はあまり相手の顔をじっと見つめたまま話はせず、視線を少しそらし気味で話すからである。また、凝視するだけでなく、話をするときの距離も日本人と比べるとはるかに近い。だから、ますます相手と距離を置きたくなり、目をそらしてしまうと考えられる。また、筆者がお話を伺った日系ブラジル人の方の半数以上の方が、挨拶をするときにお辞儀や会釈はしていなかった。

「凝視」については渡辺（1995）でも指摘されている。例えば、「会社の朝礼で話をする上司の目をいつもしっかり見つめていたので、「生意気だ」と誤解された」とことである。

なぜ日系ブラジル人は「凝視」するのかについて考えてみよう。Aさん（3世、30代、女性）に伺ったところ、「ずっと相手のことを見て話すのは普通のことですよ。相手と同じ目の高さで見ますね。ちゃんと見ないと、話と聞いていないことになり、失礼なことですね」と答えて下さった。

したがって、日系ブラジル人が、しっかりと相

手の目を見ることは、彼らが「相手を尊重している」という意味である。が、日本人はその行為をされると、彼らの意味づけとは違い、恐怖感を抱いたり、生意気だと感じているのである。

ケース⑦ 日本の習慣を持つ日系ブラジル人

ここで挙げる事例は、実際にコミュニケーションギャップが起こったものではない。が、起こりうる可能性が非常に高いと思われるので、取り上げることにした。

日本的な習慣が残っていることとして、「箸が使える」(Aさん, Dさん, Eさん, Fさんが指摘したが、ほかの方でも十分使いこなせる方はいると思われる)、「日本食をブラジルでも家庭で食べていた」(Aさん, Dさん, Fさん)、「日本に来てからも日本食を作って食べている」(Aさん, Fさん)、「日本の演歌が歌える」(Jさん。彼は、カラオケが大好きで、サンパウロのカラオケ店でよく歌っていたし、日本語の歌詞を書き取って日本語も覚えていた)、「君が代をブラジルの学校で習って知っている」(Fさん)、「日本の漫画を読んでいた」(Gさん, Iさん)などがある。

(2) コミュニケーションギャップの原因とその解決の方向性

以上、7つのケースを見てきた。ここで、日本人から見た、コミュニケーションギャップの原因と分類してみたい。

第一に、日系ブラジル人の行動や日本語の特徴などから、日本人と同一視してしまう傾向にあるというためである。これは、ケース①と⑦に特によく現れている。日本人の頭の中で、「日系ブラジル人＝日本人」という図式が成り立ってしまう。その状態で、日系ブラジル人のブラジル人的な面を見せつけられてしまったり、日本人の常識が通用しなかったりすると、分かってもらえて当然と思いついていただけに大きなショックを日本人側が受けるのだと考えられる。この典型的な例が、ケース②であろう。

そうして、「日系ブラジル人＝外国人」という考えに至った場合、「日系ブラジル人＝外国人＝嫌いだ」と決めつけてしまう。これが、第二の原因である。それは、ケース④に見られる。単に外

国人が苦手だという意識だけでなく、日本人にしてみればあまり好ましくない行動(たとえば、ケース⑥のようなこと)を日系ブラジル人がした結果、日本人がこのように感じる場合もある。そして、このように感じてしまうとコミュニケーションをしようとは思わなくなり、コミュニケーションを回避するようになる。そうすると、ますますお互いを理解できなくなり、悪循環に陥る。

日系ブラジル人のブラジルの面が、日本人にとってよく映らないのは、特に職場においてであろう。したがって、「日系ブラジル人が職場で、ブラジル流の仕事の仕方をする」ということが、第三の原因として考えられる。それは、ケース⑤に見られる。

そして第四の原因は、「非言語コミュニケーションを日本式で解釈してしまうこと」である。これは、ケース⑥である。この場合、日系ブラジル人が尊敬の念を示している行為を、日本人は全く逆の意味である「見下す」や、「怖い」という意味づけをしているのである。

日本人から見た、日系ブラジル人とのコミュニケーションギャップは、日系ブラジル人を日本人と同一視してしまうことが原因となっていることが分かった。それだけでなく、第3章で述べたことと同様に、両者の考えや価値観の違いによる意味づけにギャップがあることが大きく作用している。そこで第5章では、日系ブラジル人と日本人のコミュニケーションギャップは、一体どのようにすれば解決することができるのか。そして、その上でどうすればお互いにコミュニケーションをうまくとることができ、共に日本社会の中で、お互いを認めあって生きていくことができるのかについて考えていきたい。

5. 日系ブラジル人・日本人間のコミュニケーションギャップとは

本稿で取り上げたコミュニケーションギャップの原因で、すべてのケースに共通していることは、お互いに自分の文化、社会の習慣や価値観、そして常識で、相手から発せられたメッセージを意味づけしていることである。その意味づけが、相手の意味づけと異なるために、コミュニケーションギャップとなっている。その中でも特に問題にな

るのは、自分では相手に対して気配りをしたり誠意のつもりで行動したことが、逆に相手には無礼だと思われてしまうことである。その例として、第3章ケース①の「挨拶」、第4章ケース③の「日本人の婉曲な表現」、第4章ケース⑥の「日系ブラジル人の凝視や接近」、第4章ケース②の「日系ブラジル人が日本人に敬語を使わない」ことが挙げられる。

本稿の第3章と第4章の事例では、自分では相手に失礼にならないようにしたのだが、逆に相手は不快な思いをしている例が多く見られた。しかし、少しでもお互いのタブーを知っていたら、少なくとも相手の誠意を誠意として受け止めることができたかもしれない。そこまで至らなくとも、お互い相手に対して「失礼だ」と感じなくて済んだと思われる。

それから、「お互いに深く付き合う前に、あるいは対人コミュニケーションをしていないにもかかわらず、相手の行動様式などから、お互いの『イメージ』を作ってしまうこと」も大きな原因であるといえよう。ここでいう「イメージ」がマイナスイメージだと、さらにそのイメージは肥大化し、しまいにはコミュニケーションを回避し、ますます相手のことを理解しなくなるという悪循環に陥る。これは、第3章ケース⑥、⑦や第4章のケース④に顕著に現れている。そして、この手のコミュニケーションギャップを感じているのは、日系ブラジル人側だと日本人と接する機会の少ない人や、日本語会話があまりできない人により多いのではないだろうか。また日本人側だと、年輩の方（60歳以上）に多く見られるのかも知れない。

ところで、数多くの日系ブラジル人を雇用している企業の中には、コミュニケーションの機会を努めて持とうとして取り組んである企業もある。例えばFさん（2世、40代、男性）の会社では、新年会や納涼祭、野球やサッカーの試合などを行っている。しかし、コミュニケーションが交流にとどまらず、挨拶や昼食を一緒にとることなどの日常生活のレベルでのコミュニケーションに力点を置くことも非常に大切なことであると思う。そして、コミュニケーションの究極の目的である「お互いにメッセージを交換して分かり合う」ためには、なるべくいろいろな話をするのが要になると考えられないだろうか。

さて両者におけるコミュニケーションギャップ特有の原因は何であろうか。

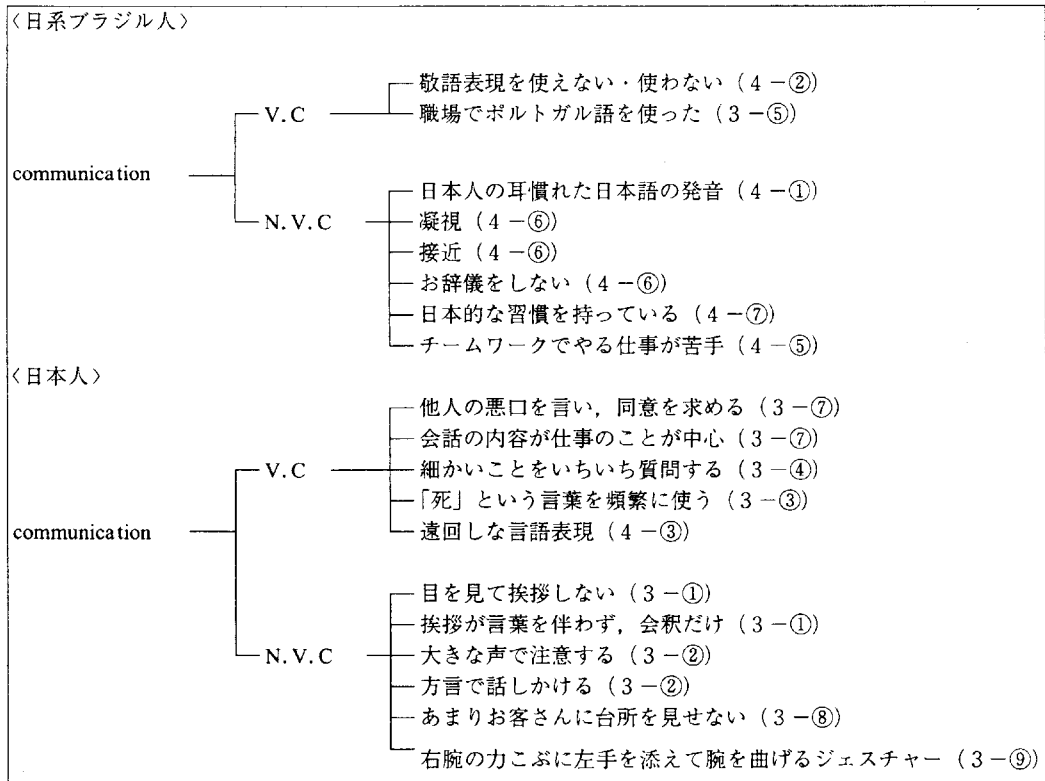
流暢な日本語を話したり、箸が使いえたり、演歌が歌えたりといった、日本的な習慣が身に付いている日系ブラジル人であればあるほど、日本人が日系ブラジル人に対してすべての点において日本人の価値観や習慣を身につけていると思ってしまう傾向が強いためである。このことは第3章ケース①や第4章ケース①、⑦にみられた。

この原因の場合、日本人が日系ブラジル人をどちらかという「日本人」として意識している間は、日本人側にはそれがコミュニケーションギャップとして認識されていない。しかし、日系ブラジル人側はギャップを感じ、挨拶では日本人を「冷たい」と意味づけしている（第3章ケース①）。そして、日本人が日系ブラジル人を日本人とは違うことに気づいたその瞬間、日系ブラジル人に対して、「裏切られた」や「わがまま」と意味づけをしてしまうのである。それは今まで日本人の感覚が通用すると思っただけに、より強くギャップを感じるのである。

解決方法としては、日本人側は基本的に日系ブラジル人と日本人では文化的背景が違うことを意識することであろう。第3章と第4章を検討して、日本人は日系ブラジル人に対し、日本的な価値観などを求めすぎる傾向があると感じた。また、違いに気づいたら今度は過剰に日系ブラジル人のことを「外国人」というカテゴリーに当てはめすぎてしまわないようにすべきだと思う。その違いを認め、外国人としての面でなく、同じ「人間」としてコミュニケーションをしていくことが本当に求められていると感じてならない。

また日系ブラジル人側は、日本に来ているのだから、ある程度日本（語）のことを知る必要があるのではないかと。本稿でも、日本（語）のことを知らないが為にコミュニケーションギャップが起ってしまった例を数多く例示した。少しでも良いから、日本人と接していこうとする姿勢が、コミュニケーションギャップの有効な解決方法になると感じる。

コミュニケーションギャップの解決方法を考えてみたが、一筋縄ではいかないことが明らかになった。それはどうしてなのだろうか。ここで第1図に注目したい。この図は、本稿の第3章と第



第1図 日系ブラジル人・日本人のコミュニケーションにおける誤解を招いた行為

注1) 3-①などは、第3章ケース①の意味である。

注2) V.C.は言語コミュニケーション Verbal Communication, N.V.C.は非言語コミュニケーション Non Verbal Communication のことである。

4章で挙げた具体的事例を整理したものである。この表から分かることは、コミュニケーションギャップの原因が、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションを比較してみると、後者の原因の方が多くなっていることである。非言語コミュニケーションの性質の一つである「非言語コミュニケーションの中には、Informal Learning (無意識のうちに見て学んだ行動様式)が多く、それを意識化して外国人に教えるのは難しい」(日向, 1989; p.73)ということが、その原因と思われる。

したがって、非言語コミュニケーションはその社会独特のメッセージの伝え方だと言える。その社会に属さない人にとっては、非言語コミュニケーションで表されたメッセージを正しく読みとることができないのは当然のことである。本稿で紹介した例でも、この非言語コミュニケーション

の性質が理解されていなかった。非言語コミュニケーションの持っている機能に対する理解不足と、両者の意味づけの差が、コミュニケーションの原因であるし、また解決を妨げる主因であると言える。

おわりに

以上日系ブラジル人と日本人のコミュニケーションギャップについて、具体的な事例、その原因、その解決方法を考察した。その結果、日系ブラジル人と日本人の価値観の違いはもちろん、両者の意味づけの差が、コミュニケーションギャップの問題を越えて様々な問題に展開していくことが浮き彫りにされた。

コミュニケーションの究極の目的の一つは「お互いを理解すること」にあるのではないだろうか。相手を理解することは、決して相手の文化をすべ

て取り入れることではない。また、相手に自分の文化を押しつけることでもない。これらは理解ではなく、同化である。理解とは、違う点は違う点として認め、相手はもちろん自分の文化も尊重していくことだと思う。コミュニケーションギャップとは、まさに両者の違いを違いとして気づいていないことで見えてくるものである。たしかに言葉の壁、文化の壁、自分自身の中にある偏見という壁は存在する。が、その壁に臆さず、「日本人と外国人」ではなく「人間」として挨拶などの日常生活におけるコミュニケーションの機会を多く持つこと、そしてそれを大切にしていくことを提言したい。

最後に、調査にご協力いただいたすべての方に深く感謝の意を表したい。

注

- 1) 日本民族を祖先に持つ、日本とブラジルの二重国籍の日系2世、3世、及び日系人の配偶者である非日系人のことを指す。この定義は渡辺(1995a; p. 34-35)による。
- 2) かつての日系ブラジル人研究は、ブラジル移民史及びブラジル移民社会(日系コロニア)についての研究が中心であった。例えば猪股(1985)がある。
- 3) 渡辺(1995a)によると、旧入管法では、「日本人の配偶者など」(日系2世を対象とし、父母が日本に居住することが条件で、日本で制限なく就労が可能)か、「法務大臣が特に在留を認めるもの」(父母が日本に居住していない日系2世、日系3世を対象とするもので、3世の場合は祖父母の戸籍謄本と出生証明書に祖父母の名前が記載されていることが必要であるなど、資格検査は厳格)であった。が、入管法改正で、「法務大臣が特に滞在を認める者」の中から「定住者」が新たに加わり、手続きも簡略化した。2世の場合、日本国籍の父か母を持つ場合は「日本人の配偶者など」で、親が日本国籍を離脱し、外国籍である2世の場合は「定住者」となる。
- 4) ここで、言語コミュニケーションを重視するのは、日系ブラジル人と日本人という「人間と人間」のコミュニケーションだからである。「人間の定義として、ホモ・ロクエンシス(Homo Loquens; 言葉話す動物)などがある」とあるくらい、言語は人間を考える際に重要なものになる。

- 5) このデータは川崎市(1996)「統計川崎 No.187 1995年度農業センサス結果」による。

文献

- 川崎市(1993):『川崎市外国籍市民意識調査実態調査報告書』
- 川崎市(1996):『統計川崎 No.187-1995年度農業センサス結果-』
- 久米昭元(1993):『コミュニケーション研究の主な領域』石井敏・橋本満弘編著『コミュニケーション基本図書第1巻コミュニケーション論入門』桐原書店、P.25-53
- コガ・エウニセ・アケミ・イシカワ(1995):『日系ブラジル人のアイデンティティー文化資本から見た日系人集団-』人間文化研究年報第19号、お茶の水女子大学人間文化研究科、P.151-158
- ジョン・コンドン(1980):『コミュニケーションギャップ-文化的障害について』ジョン・コンドン編著 近藤千恵訳『異文化間コミュニケーション-カルチャーギャップの理解』サイマル出版会、P.3-22
- 成毛信男(1993):『言語コミュニケーションの概念と特徴』石井敏・橋本満弘編著『コミュニケーション基本図書 第1巻 コミュニケーション入門』桐原書店、P.126-167
- 橋本満弘(1993):『非言語コミュニケーションの概念と特徴』石井敏・橋本満弘編著『コミュニケーション基本図書 第1巻 コミュニケーション入門』桐原書店、P.168-19
- 日向ノエミア(1989):『日本人と挨拶するときの難しさブラジル人の場合』(特集日本語教育と文化)日本語学8-12、P.72-77
- 平井一弘(1993):『コミュニケーションのレベルとその理論的特徴』石井敏・橋本満弘編著『コミュニケーション基本図書 第1巻 コミュニケーション論入門』桐原書店、P.75-101
- 広田泰生(1994):『日系人家族の生き方』奥田道広・田嶋淳子・広田泰生共著『外国人居住者と日本の地域社会』明石書店、P.192-257
- 渡辺雅子編著(1995a):『共同研究出稼ぎ日系ブラジル人 [上] 論文篇 [就労と生活]』明石書店
- 渡辺雅子編著(1995b):『共同研究出稼ぎ日系ブラジル人 [下] 資料編 [体験と意識]』明石書店